

運動器エコー物語 2020

なぜエコーを始めたのか

皆川洋至

医療法人城東整形外科

エコーゼミの門を叩いたのは1987年、剣と医の道を志す大学4年生のときでした。道場主は、後にエコー界のトップに君臨する伊東紘一先生(自治医科大学名誉教授、現 済生会陸前高田診療所長)。プローブを当てるだけで簡単に身体の中がみえる、この衝撃が脳裏に焼き付きます。そして卒後4年目、鈍(なまくら)コンベックスで論文を書き上げることへとつながります¹⁾。9年間の義務年限を終えた後、井樋栄二先生(東北大学整形教授、元秋田大学整形外科教授)らと肩関節の基礎・臨床研究に明け暮れます。天下を取った気分で「俺の専門は肩関節!」と叫ぶ毎日。学位論文・日本肩関節学会賞論文はじめ^{2,3)}、数多くの論文を書きました。

あるとき、学会で腱板断裂の保存治療成績を報告します。手術例は保存治療の成績不良例を意味するはず、それにもかかわらず過去の論文は対象から手術例を除外したものばかり、手術せず徹底的に保存治療した報告は相当インパクトあるものになりました。ところが学会場である重鎮から叱咤されます…「勇気がない!」。重鎮には全国からよくならない手術対象患者が集まる、一方、底辺の自分には近所の肩痛患者が集まる、だからこそ多くの無症候性腱板断裂患者をみてきた、拳を握り締め心の中で叫びます。

「腱板断裂があるから痛いわけではない」。

この真実を明らかにするため行ったフィールドワーク⁴⁾をポータブルエコー Sonosite 180、さらに黎明期運動器エコー時代の幕開けを日立 EUB 7500、東芝 Xalio が後押ししてくれました(写真)。それから約20年、降り積もった雪をかき分け、ようやく整形外科を塗り替える手前まで辿り着いた、そんなところでしょうかー
To be continued.



本気でエコーを始めたきっかけ
エコーの講演後、会場にいたモナリザから接吻を受ける筆者
(2006年イタリア、ローマ)

【進化を紐解く参考文献】

- 1) 皆川洋至・他. 肩甲下筋腱単独断裂の1例. 東北整形災害外科紀要 38:110-3, 1994.
* 筆者の初論文. 捨てられていた ALOKA のコンベックスプローブで肩甲下筋腱断裂を診断した奇跡の症例報告. 論文は削除・更新されないまま生き残る, 筆者が見たくないランキング1位作品.
- 2) 皆川洋至・他. 腱板を構成する筋の筋内腱-筋外腱移行形態について. 肩関節 20:103-10, 1996.
* 日本肩関節学会高岸直人賞受賞論文. 解剖学教室に何度も通い詰め, 腱板の構造に深く切り込んだ筆者会心の代表論文(学位論文テーマも同じ).
- 3) Minagawa H, et al. Humeral attachment of the supraspinatus and infraspinatus tendons: an anatomic study. Arthroscopy 14: 302-6, 1996.
* 筆者の初英語論文. レビュアーとのやり取りが苦痛で, 二度と英語論文なんか書かない! と誓った記念碑的論文.
- 4) Minagawa H, et al. Prevalence of symptomatic and asymptomatic rotator cuff tears in the general population: From mass-screening in one village. J Orthop 10: 8-12, 2013.
* 毎週金曜日に大学を抜け出し, 上小阿仁村まで車で往復2時間, 無償診療を6年間続けた地道な努力の結晶. 日本で初めて腱板断裂の真実を明らかにした業績の英語版.